SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

ゴールデンカムイ

2024 年／日本映画
配給：東宝／127 分

2024（令和 6）年 2 月 3 日鑑賞　TOHO シネマズ西宮 OS

Data　２０２４－１３

監督：久保茂昭
原作：野田サトル『ゴールデンカムイ』
出演：山﨑賢人／山田杏奈／眞栄田郷敦／工藤阿須加／柳俊太郎／泉澤祐希／矢本悠馬／大谷亮平／勝矢／高畑充希／木場勝己／大方斐紗子／秋辺デボ／マキタスポーツ／玉木宏／舘ひろし

みどころ

邦画のオリジナル脚本の欠乏ぶりは嘆かわしいが、人気コミックの映画化は悪くない！日本で大人気の『キングダム』、『沈黙の艦隊』に続いて、『ゴールデンカムイ』が遂にスクリーンに！

私は『カムイ伝』はよく知っていたが、『ゴールデンカムイ』って一体ナニ？予告編で何度も見た、「二〇三高地の戦い」から始まる、“不死身の杉元”を主人公とした、莫大なアイヌの埋蔵金を巡る「三つ巴のサバイバルバトル」はチョー面白そう！家族 4 人の北海道旅行では、阿寒湖観光の際にアイヌ劇も見たし、アイヌ民芸店では民族衣装に身を包んで写真撮影もしたから、アイヌの生態もバッチリ！そんな目には、文武両道はもとより、熊や狼の扱いから料理まで何でもござれのアイヌの少女アシリパも新鮮だ。

『レッドサン』（71 年）では、チャールズ・ブロンソン、アラン・ドロン、三船敏郎による“三つ巴のお宝争奪バトル”が興味深かったが、あれは私利私欲によるもの！しかし、本作に見る、第七師団の鶴見中尉や元新撰組副長・土方歳三の埋蔵金狙いは、さにあらず！それぞれの理想実現のためだから、その壮大な世界観に注目！ストーリーの大枠紹介と主要キャラの人物紹介という本作の狙いが十分に達成された今、エンドロール終了後に流れる“予告編”を見ながら、シリーズ第 2 作へも、乞うご期待！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■人気コミックが映画化！こりゃ必見！シリーズ化必至！■□■

中国の歴史大好き人間、中国の時代劇大好き人間である私は、秦の「始皇帝」や「項羽と劉邦」、そして「三国志」が大好きだ。したがって、スティーブン・シン監督の『項羽と劉邦　その愛と興亡』（94 年）（『シネマ 5』140 頁、『シネマ 34』140 頁）、張芸謀（チャ

ン・イーモウ）監督の『HERO』（02 年）（『シネマ 3』29 頁、『シネマ 5』134 頁）、さらにはTV ドラマの『三国志』等はすべて興味深く鑑賞している。『三国志』については、大人気になっている原泰久の人気コミック『キングダム』も、私は大好き。したがって、その原作を映画化した『キングダム』シリーズも、私は大いに楽しんでいる（『シネマ 43』274 頁、『シネマ 51』158 頁、『シネマ 53』217 頁）。他方、1980 年代に私が教えられた人気コミックが『沈黙の艦隊』（88～96 年）だった。これは映像化不可能と思われていたが、つい先日、大沢たかお主演でシリーズ化を前提として映画化されたから、これも大いに楽しんだ。

しかるところ、今般、野田サトル原作の大人気コミック『ゴールデンカムイ』が映画化！しかもシリーズ化が大前提だから、すごい。1967～1968 年の学生運動真っ盛りの時代の私は、『銭ゲバ』、『ゴルゴ 13』等の人気漫画とともに、白土三平の『カムイ伝』という超骨太作品にハマッていたが、残念ながら『ゴールデンカムイ』は全く知らなかった。しかし、予告編を数回見ているうちに本作への期待が膨らんでいたから、そんな本作を、やっと 2 月 3 日に鑑賞できてハッピー！

■□■二〇三高地に見る不死身の杉元の鬼神の戦いぶりは？■□■

日露戦争（1904～1905 年）における最大の激戦地となった、「二〇三高地の戦い」は、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』によって日本国民の多くに知れわたると共に、乃木大将の“愚将ぶり”も通説になっていった。そのことの是非を含めて、大学 1 回生の夏休みに帰省中の松山で同小説を読んだ私は、一度は二〇三高地や旅順の観光旅行をしたいと願っていたが、2000 年の夏にはじめてそれが実現した。二〇三高地と旅順への観光旅行は 2 回目、3 回目と続いたが、その度に私はさまざまなパンフレットや資料を購入して勉強したから、二〇三高地の攻防戦については、かなり詳しい知識を蓄積している。

本作冒頭に見る二〇三高地の攻防戦と、そこで“不死身の杉元”と名付けられた兵士・杉元佐一（山﨑賢人）の鬼神の如き戦いぶりは、そんな私の目にも見事なものだ。クリント・イーストウッド監督の『硫黄島』2 部作である、『父親たちの星条旗』（06 年）（『シネマ 12』14 頁）と『硫黄島からの手紙』（06 年）（『シネマ 12』21 頁）に見る、硫黄島の戦いぶりにも私は十分納得できたが、本作冒頭における二〇三高地の戦いぶりと、そこでの“不死身の杉元”の鬼神の如き戦いぶりに注目！

■□■2 年後の杉元はどこに?アイヌの莫大な埋蔵金とは?■□■

阪本順治監督の『人類資金』（13 年）（『シネマ 32』209 頁）は、陸軍の埋蔵金を巡る面白い映画だった。それに対して、本作は“アイヌの莫大な埋蔵金”を巡る面白い映画だ。そのシリーズ第 1 作となる本作は、まさに「三つ巴のサバイバル・バトル、開幕！！」の映画だが、日露戦争の終了から 2 年後の今、杉元は北海道で孤独な砂金採りの作業を続け

ていた。しかし、どうもその成果はゼロらしい。アメリカでは1848年頃にゴールドラッシュが起きたが、明治30（1897）年代半ばに、北海道の歌登、浜頓別、中頓別一帯で、空前のゴールドラッシュが起きたことは歴史上の事実らしい。しかし、スクリーン上の杉元の姿を見る限り、今や砂金はすべて採り尽くされてしまったようだ。

そんな杉元に対して、「アイヌ民族から強奪された莫大な金塊を奪った男＝「のっぺら坊」が、捕まる直前に金塊をとある場所に隠し、網走監獄に収監後、そのありかを記した刺青を24人の囚人の身体に彫り、彼らを脱獄させたが、その刺青は24人全員で一つの暗号になる」という話をした男は、後藤竹千代（マキタスポーツ）だ。そんな話をした直後に、後藤は熊に襲われてあっけなく死んでしまったが、同じく熊に襲われ危機に陥った杉元を、お得意の弓矢で助けたのがアイヌの少女アシリパ（山田杏奈）だ。

さあ、そんな「三つ巴のサバイバル・バトル」の序章を、久保茂昭監督はいかに要領よくかつ面白く見せていくの？本作の大スクリーン上で展開していくストーリーは、原作コミックを読破している観客はもとより、私のように原作コミックを全然読んだことのない観客も十分楽しむことができるものになっている。

■□■原作者は北海道出身！アシリパ一族とアイヌの生態は?■□■

私は2013年8月の家族4人揃っての北海道旅行の際に、昼間は阿寒湖を観光し、夜はアイヌの劇を鑑賞した。そして、劇を鑑賞した後は阿寒湖畔のアイヌ民芸店で家族揃って民族衣装に身を包み、写真撮影をした。本作は、“ある目的のため”に埋蔵金探しに挑戦することを決めた杉元と、金塊を奪った男に父親を殺された恨みを持つアシリパが、共に助け合いながらその目的に向かって進んでいくストーリーが基本だが、その展開の中ではひょっとして2人の恋模様も・・・？そんな期待（？）もあったが、少なくともシリーズ第1作たる本作では、その気配は全くない。

それに代わって本作では、杉元がアシリパの一族たちが住む村落を訪れ、祖母のフチ（大方斐紗子）や、や大叔父（秋辺デボ）たちと交流を深める姿が描かれ、その中でアイヌの言葉や生態が次々と紹介されるので、それに注目！さらに、本作では、数度にわたって、アシリパから興味深いアイヌ料理が紹介されると共に、逆に杉元の方から、“うんこ”と間違えられそうになりながらアイヌが食したことのない日本味噌が紹介されていくので、そのバラエティ色豊かな展開にも注目！これらは、原作者が北海道出身だからこそできたことだから、それを踏まえながらしっかり勉強したい。

それにしても、このアシリパというお嬢さん、言葉がバイリンガルなら、熊や狼の知識から、野山で食することができる草木の知識まで、完璧！そのうえ、弓矢の腕を含めて、あらゆる武術も達者だから、かなりのスーパー少女だ。金塊狙いの男に殺された父親アチャ（井浦新）は村人たちのリーダーとして尊敬を集め、熊の棲む洞窟の中にも敢然と一人で入っていった猛者だったそうだが、アシリパはその優秀な血をすべて継承しているらし

い。“不死身の杉元”に、こんな文武両道を備えた才女が側につけば、まさに鬼に金棒！誰でもそう思うはずだが、金塊を狙う他の勢力（の強大さ）は・・・？

■□■壮大な世界観（1）陸軍第七師団が登場！それはなぜ？■□■

「三つ巴の戦い」の代表は、諸葛孔明が発案した「三国分断の計」を実践した「三国志」。他方、映画での「三つ巴の戦い」の代表は、チャールズ・ブロンソン、アラン・ドロン、三船敏郎が主演した、テレンス・ヤング監督の『レッドサン』（71 年）だ。同作は、同世代ながら何よりも国籍が違う 3 人の国際スターを登場させたものだから、そのストーリー構成を「あちらを立てればこちらが立たず」としないための工夫が大変だったはずだ。

しかして、本作では、アイヌの埋蔵金を狙って行動を開始し、1 人また 1 人と背中に刺青を彫った脱獄囚人たちを捜し求めていく杉元とアシリパの前に立ちはだかったのは、陸軍第七師団を率いる鶴見篤四郎中尉（玉木宏）だから、ビックリ！鶴見を演じるのは玉木宏だが、この“狂気のキャラクター”はまさに原作のコミックで練り上げられたものだから、それに注目！鶴見が上官を平気で射殺してしまう“狂気の男”なら、鶴見に従う部下である、月島基（工藤阿須加）、谷垣源次郎（大谷亮平）、尾形百之助（眞栄田郷敦）、二階堂浩平／洋平（栁俊太郎）たちも、それぞれ日露戦争で生き残った一騎当千の兵士たちだから、彼らのキャラにも注目！

もっとも、あくまで本作の主人公は杉元だが、鶴見に従う第七師団の兵士たちは、本作中盤では、まず尾形が杉元にやられ、終盤では、捕らえた杉元の監視役になっていた二階堂兄弟がやられてしまう。さらに、馬車に乗っての逃亡劇でも、第七師団は大きな損失を被ってしまうので、その姿に注目！しかし、大日本帝国陸軍の第七師団の実力は、杉元との戦いで数名の損失を受けたくらいでビクともするものではない。続くシリーズ第 2 作に向けての巻き返しは必至だろう。『レッドサン』に登場したチャールズ・ブロンソンもアラン・ドロンも獲物を狙った目的は“私利私欲”だった。しかし、本作に見る第七師団のリーダー鶴見がアイヌの埋蔵金を狙う目的はそうではなく、二〇三高地の無謀な戦いに将兵を駆り立てた大日本帝国陸軍そのものに対する不満に発したもの。したがって、埋蔵金を軍資金として、まずは北海道に軍事政権を樹立するという壮大な理想に基づくものだから、その世界観に注目！

■□■壮大な世界観（2）新撰組副長、土方歳三も登場！■□■

私は 2013 年 9 月の函館旅行でたっぷりと五陵郭見学をした。榎本武揚率いる五陵郭軍に協力して新政府軍と戦ったのが、旧新撰組で“鬼の副長”と呼ばれていた土方歳三だ。司馬遼太郎の小説を原田眞人監督が岡田准一主演で映画化した『燃えよ剣』（20 年）（『シネマ 50』156 頁）では、土方は五陵郭の戦いで討ち死にしていたし、歴史上の定説もそのはずだ。しかし、コミックなら何でもありだから、本作ではその土方歳三（舘ひろし）がアイヌの埋蔵金を狙う一方の勢力として登場してくるので、それに注目！

土方は 1835 年生まれだから、日露戦争終結後 2 年を迎えた 1907 年なら、彼の年齢は

72 歳。そうだとすると、幕末の戊辰戦争を生き延び、五稜郭の戦いも生き延びた彼が、政治犯として収監されていた網走監獄を脱獄したという設定も確かにありだ。また、そうだとすると、“蝦夷共和国の樹立”を目指す土方の理想がどこまで理解できるかはともかく、“のっぺら坊”の手で背中に刺青を彫られた囚人たちが、土方の金塊狙いに協力するのも、なるほどと頷くことができる。もっとも、戦いの主流が刀から銃に変わった今、土方は鶴見から「新撰組の亡霊め！」と罵られていたが、その剣技は今なお健在だし、指揮官としての才覚も健在らしい。土方が、脱獄した囚人たちの協力を得てアイヌの埋蔵金を狙うのも、第七師団の鶴見と同じく、私利私欲ではなく、五稜郭で榎本武揚が果たせなかった“蝦夷共和国の樹立”を目指すものだから、その世界観もすごい。

本作では、字幕が流れ終わった後、シリーズ第 2 作での新撰組二番隊隊長、永倉新八の登場が予告されているので、第 2 作では、金塊を狙う旧新撰組の役割の比重も増大しそうだ。『三国志』では諸葛孔明の「三国分断の計」という壮大な世界観が何よりも注目されたが、本作でも第七師団による新たな“軍事政権樹立”の理想や、新撰組による新たな“蝦夷共和国樹立”の理想という壮大な世界観に注目！①張作霖爆殺事件（1928 年 6 月 4 日）、②満州事変（1931 年 9 月 18）、③第一次上海事変（1932 年 1 月 28 日）、④盧溝橋事件（1937 年 7 月 7 日）、⑤第二次上海事変（1937 年 8 月 13 日～）と続く中で始まった日中戦争から、1941 年 12 月 8 日に始まった大東亜戦争の中で、日本（大日本帝国）が描いた“大東亜共栄圏”の理想（壮大な世界観）はあっけなく潰えてしまったが、さて、彼らの理想は？

■□■白石は脱獄囚なのに、なぜ杉元の協力者に？■□■

原作が累計 2500 万部を突破する大人気になった原因の一つは、『キングダム』や『沈黙の艦隊』と同じように、主人公をはじめとする主要な登場人物のアクの強いキャラを徹底させていることにある。そんなキャラの 1 人が、アイヌの埋蔵金の物語を杉元に語った後藤竹千代だが、あっさり熊に殺されてしまった彼に代わって登場するのが、最初に杉元とアシリパに捕らえられてしまう、24 人の脱獄犯の 1 人である白石由竹（矢本悠馬）だ。埋蔵金のありかを探るためには、彼の背中に彫られている刺青を剥がすことが不可欠。もちろん、アメリカのインディアンと同じように（？）、杉元はそれを躊躇するほどヤワな男ではない。したがって、捕らえられてしまった白石には、そんな過酷な運命が待ち受けていたはずだが、そこで杉元に「待て！殺すな！」とストップをかけたのがアシリパだ。

シリーズ化を大前提とした本作は、要所要所で 2 人の主人公それぞれの人生観や回想録が登場するが、ここで最初のアシリパの人生観が語られるので、それに注目！他方、杉元のそれは、幼馴染の寅次（泉澤祐希）と梅子（高畑充希）を巡る回想シーンを含めて、かなり詳しく語られるので、それにも注目！もっとも、それはストーリーが進んでいく中でのことだから、ここでは、アシリパのお声がかりによって命拾いをした白石が“自由”を得た後、どんな行動に走るのかに注目したい。

24 人の脱獄囚たちは「小樽へ行け」と命じられていたそうだが、それはなぜ？そんな情

報をキャッチした杉元とアシリパも小樽へ向かったが、そこには埋蔵金を探し求める第七師団も新撰組も集まっていたから、そこでひと波瀾起きることは確実だ。そんな状況下で、死んでしまった後藤と違い、“脱獄王”の異名をもつ白石は、第七師団に捕らえられ、手酷い拷問を受けている杉元をアシリパと協力して救い出す役割を果たすので、それに注目！それにしても、なぜ白石は杉元とアシリパに協力することになったの？そんなストーリー展開も、あなた自身の目でしっかりと。

■□■第２作の展開は？新キャラは？乞うご期待！■□■

シリーズ第１作最大の目的は、『ゴールデンカムイ』という超娯楽巨編の全体像と主要キャラの人物像を面白く明示することにある。それに成功すれば、第１作が、壮大な世界観に基づく壮大な物語の序章に過ぎないことがわかるはずだ。すると、シリーズ第２作の展開は？そこで登場する新キャラは？

高倉健は、森谷司郎監督の『海峡』（82 年）や、山田洋次監督の『幸福の黄色いハンカチ』（77 年）等への出演もあるが、彼の代表作の一方は『昭和残侠伝』シリーズであり、他方は、私はあまり好きではないが、『網走番外地』シリーズだ。私は 2013 年８月の北海道旅行で網走刑務所も見学したが、ハッキリ言ってあまり気分の良いものではなかった。しかし、シリーズ第２作では、間違いなく、24 人の囚人の背中に刺青を彫った本作の“影の主役”ともいえる“のっぺら坊”の全体像が明示されるはずだ。また、それと共に網走刑務所での囚人たちの獄中生活ぶりも詳しく描かれるはずだ。

他方、本作終盤に少しだけ登場するのが柔道家の大男・牛山辰馬（勝矢）だが、彼のキャラや役割は本作では明らかではない。また、土方歳三も登場はするものの、ごく短時間だけだし、長倉新八も第２部での登場が予告されるだけだ。したがって、第２部では間違いなく新撰組の活躍ぶりが詳しく描かれるだろう。また、日露戦争で前頭部を損傷したため、額をプロテクターで保護している、第七師団のリーダー鶴見中尉の残忍さと、組織を率いる率いるリーダーシップは、せっかく捉えた杉元に脱走されてしまった本作では十分に発揮できていなかったが、第２部では巨大な組織力にモノを言わせて埋蔵金に向かって迫ってくるはずだろう。すると、やっぱりアシリパと白石の協力があるとはいえ、一匹狼的に埋蔵金争奪戦に参戦してきた杉元は圧倒的に非力で不利？たしかにそのとおりだが、そこは“不死身の杉元”のクソ馬力で何とか対抗したいものだ。さあ、そんなシリーズ第２作に、乞うご期待！

2023（令和５）年２月８日記